

## ■書 評

ローベルト・ムージル著 加藤二郎訳

『ムージル著作集 第一、二巻』  
[特性のない男 I, II] (松籟社・1992年)

経営学部教授 大場 恒明

オーストリア作家ムージルの死後50周年を期して待望の著作集刊行が始まったことをよろこびたい。とくに代表作『特性のない男』(1930, 33年, 未完)は、これを措いて20世紀文学は語れない作品だけに、外国文学紹介の枠を超え日本文学界の財産目録に書き込まれる訳業である。

オーストリア・ハンガリー帝国崩壊を目前にした1913年、古きよきヨーロッパの最後の光彩がたゆたう首都ウィーンで、1918年の皇帝フランツ・ヨーゼフ1世即位70周年祝賀式典計画が進行する。同年行われるはずのプロシャ皇帝の即位30周年記念に対抗して、オーストリア文化を最も内面的な本質において世界に顕彰しようとする「平行運動」をめぐり、人間模様が展開する。

しかし、ムージルが意図したのは特定の時代の絵巻風な描写ではなく、主人公ウルリヒの認識を通して内面世界の広がりや深みのすべてを、神なき世界のダンテ的彷徨として描きつくそうとする壮大な試みなのである。虚構の「平行運動」をはじめ、人物や事件はすべて作者の輻輳した精神を動かす推進装置にほかならない。平行し交錯し循環する断片化した時間に囚われた人物たちの言動は、「千遍一律の世」を現出させ、統計的事実のように「似たようなこと」が繰り返し起こる事件は「何も起こら

ない」に等しい。このような世界の構造を全体性において描くとなれば、直線的、単層的、連続的、不可逆的に進行する伝統的小説の時間秩序は無効である。小説の始まりは「一種の序文」で、結末は暫定的な「一種の終わり」でしかない。天体の運行と気象状況への言及が延々と続く冒頭部分は在来小説へのアイロニーであり、19世紀小説的な意味では、『特性のない男』は、T.マンの言うように「もはや小説ではない」。作者の亡命生活中の急死により未完となったが、本来、この作品に内在する主題と時間は完結不能のものでもあろう。

進歩と功利を至高の価値とする人間的「特性」は、機械文明を支える「現実感覚」の産物である。ウルリヒは硬直した「特性」を拒否し、「可能性の感覚」をたよりに、知性と魂と肉体の統合を求めて古今の人知の領地に君臨しようとする。選ばれた知者ウルリヒは彷徨のはてに双子の妹アガーテとの非時間的な至福と救済の「千年王国」に入る(未刊行のIII以降)。ウルリヒが「世襲地に富む」という原意をもち、アガーテが「善」を意味するギリシャ語を語源とすることは、きわめて暗示的だ。

ムージルの想念は、難解ではあるが重層的な言語が再読をうながし、読者はそのつど新たな発見のよろこびを味わう。ときに痛烈な、ときに軽妙なアイロニーが笑いをさそい、虚無の深淵をのぞかせる。

訳者の明晰でしなやかな文体は、飛翔しつつも透明な原文に同化し拮抗して、ゆるぎない。『特性のない男』は、1964年に訳者を代表として共訳が河出書房新社から公刊されているが、『ムージル著作集』全9巻のうち6巻を占める今回の翻訳は訳者の永年の精緻な研究にもとづく個人訳である。